

# 19世紀末イタリアのアナーキズム

横 山 隆 作

## Ⅰ. はじめに

アナーキズム (anarchismo, 従来「無政府主義」と訳す) とは、アナルキア (anarchia) という社会をつくろうという社会運動である。19世紀末にアナーキストは、イタリアおよびヨーロッパの耳目を聳動させる事件を続発させた。本稿はこのアナーキズムに関連する事件史であって、これはまた19世紀末から20世紀初頭の時期のイタリア労働運動という小生の基本的研究課題の一部分をなすものである。<sup>1)</sup>

## 註

- 1) 小生の当初の問題意識は、アナーキズムが労働運動全体の中ではたした具体的な役割を明らかにしようというものであった。しかし本文中に述べるように、19世紀末のアナーキズム運動は厳しい弾圧によって、ほとんど「地下活動」に追い込まれたため、当時著名なアナーキストの著作・論文は少なくないとはいえ、彼らの活動と労働者大衆の行動との直接の関係を示す資料には乏しいのである。アナーキズムの思想ではなく、アナーキストの行動をとらえようと考えたため、かえって本稿が表面化した事件の年代記となってしまう、分析に欠けることになったことを認めざるをえない。

## Ⅱ. イタリアのインテルナツィオナリスタ

ミハイル・バクーニンは、1864年1月イタリアに入国し、同年8月出国、10月にはロンドンでカール・マルクスと会見し、すでに同年9月28日にロンドンで結成されていた国際労働者協会（第一インターナショナル）の事業に協力することになった。バクーニンは1864年12月イタリアに再度入国し、この後1867年9月までナポリに滞在して、ことにマッツィーニ (Giuseppe Mazzini, 1805年生～1872年没) の理論的弱点をつき、何人かの支持者を獲得した。<sup>2)</sup>

1871年6月末にイタリア王国の首都がローマに移転し、統一がほぼ完成した。一方、同年3月から5月にかけて存在したパリ・コミュンは、ガリバルディ派などのイタリアの民主共和主義者に思想的衝撃を与えた。またマツィーニ派は、1870年3月24日、6月5～7日の共和制樹立を目的とした武装蜂起の失敗、マツィーニ自身のパリ・コミュン批判とバクーニンのマツィーニ批判、そして1872年3月10日のマツィーニの死去によって、大きく勢力を後退させた。これにかわって、バクーニンの影響下にあるインテルナツィオナリスタ (internazionalista)、すなわちイタリア各地のインターナショナル支部の加盟者・活動家が労働運動の戦闘的主力となった。当時イタリアでは、ドイツ系の社会主義理論を理解する者はまれであり、バクーニンの理論がインターナショナルの指導的理論とみなされていた。1871年11月12・13日にスイスのソンヴィリエ (Sonvillier) で開かれたインターナショナル・ジュラ連合 (Fédération jurassienne) 結成会議の後、イタリアのインターナショナル支部のほとんどはジュラ連合支持、すなわち総評議会 (=マルクスの方針) に反対する側にまわった。1872年8月4～6日、イタリアのインターナショナル支部21団体の大会がリーミニ (Rimini, エミリア・ロマーニャ州東部の港町) で開かれ、インターナショナル総評議会との絶縁を決議した。イタリアのインターナショナル支部は、1873年末に、129団体、26,704人の加入者を擁する勢力に育っていた。<sup>3)</sup>

第一インターナショナルは、1872年9月2～7日のハーグ大会で、総評議会のニューヨーク移転を決議して、実質的に分裂・解体した。1872年9月15日、スイスのサントイミエ (Saint-Imier) にバクーニン、ギョーム (James Guillaume) など15名のジュラ連合系アナキズムの指導者が集まった。このサントイミエ会議は、「労働者の団体 (sezioni支部) と連合の自治と独立は働く者の解放の第一の条件である (「ドイツ共産党の支配を排除する」含意)」、「すべての政治権力の破壊はプロレタリアートの第一の義務である」、「労働の自由かつ自発的な組織が国家の権威的特権的機関にかかわらなければならない」、「ストライキは我々にとって闘争の貴重な手段となろう」等の決議を行った。<sup>4)</sup>

1874年8月7・8日、アンドレア・コスタ (Andrea Costa, 1851年生～1910年没) を中心としたアナキストの武装蜂起がボローニャなどで実行されたが (バクーニン自身もボローニャに潜入して待機した)、完全な失敗に終わった。政府はイタリアの全てのインターナショナル支部に解散を命令した。1876年7月2日 (諸説あり)、ベルンでバクーニンが死去した。1877年4月5～12日、再びアナキストの武装蜂起が、カルロ・カフィエーロ<sup>5)</sup>やエッリーコ・マラテスタ<sup>6)</sup>を中心とした数十名によって、カムパーニャ州ベネヴェント県北方のマテーゼ山脈に近いサンルーポ (S.Lupo) という寒村で実行されたが、これも失敗した。武装蜂起に大衆の支持が得られないという失敗を経験して、インテルナツィオナリスタのなかでも各地方の労働組合運動や協同組合運動に直接結びついていた人々の多くが、バクーニン派のアナ

ーキズムから次第に離れていった。これらの人々のうちで北部イタリアで活動していたインテルナツィオナリスタ達が、エンゲルスと連絡をとっていた『ブレーベLa Plebe』紙のグループを中心に、1877年2月17～18日にミラノで、国際労働者協会上部イタリア連合の会議を開催して、政治（選挙）運動と労働組合運動を推進しようという合法的大衆路線をとりはじめた。さらに前記のコスタも、1879年7月27日に公開書簡「ロマーニャの友人達へAi miei amici di Romagna」を発表して、「方法の集産主義Collettivismo, 究極のアナルキアAnarchia」を目指すと言いつつも、大衆から孤立しているアナーキズムについて自己批判した。<sup>7)</sup>

1878年1月、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の死去により、新国王ウムベルト一世（Umberto I）が即位した。同年11月17日ナポリで、ジョヴァンニ・パッサナンテ（Giovanni Passanante, 彼はアナーキストではない）という料理人が国王を刺して軽傷を負わせた。翌11月18日フィレンツェで、王党派の国王支持デモに爆弾が投げられ、死傷者が出た。さらに11月20日、ピーザ（Pisa, トスカーナ州）においても爆弾事件がおきた。政府・公安当局はこれらをアナーキストの犯行ときめつけ、フィレンツェの事件では、インテルナツィオナリスタのバタッキ（Cesare Batacchi, 1849年生～1929年没）を逮捕して、終身刑に処した。<sup>8)</sup>

1881年7月、ロンドンにおいてアナーキストの国際労働者協会大会が開かれた。この会議にはイタリア代表としてマラテスタとフランチェスコ・サヴェリオ・メルリーノ<sup>9)</sup>が出席し、革命的社会主義という名称の路線を主張した。これは秘密結社型の運動ではなく、労働組合運動に参加すること——ただし武装蜂起戦術を放棄したわけではない——を強調するものであった。またこの会議は、従来からの路線である議会主義の否定、労働者グループ間の団結等を確認した。<sup>10)</sup>

1884年にマラテスタは有名な著作『農民の中へFra Contadini』を刊行した。この著作は、若いアナーキストと年長の農民との対話形式でアナーキズムの原理を解説したものである。ここでは、アナーキズムとは、社会主義であるが、国家や政府を存続させようとする社会民主主義とは異なり、国家と政府を廃止するものであり、労働者組織を基盤とするという意味の組合主義（サンディカリズム）であり、反戦・平和の国際主義であると説かれている。<sup>11)</sup>

## 註

- 2) イタリアにおけるアナーキズムおよび社会主義の草創とバクーニンとの関係については、山崎功『イタリア労働運動史』青木書店、1970年、II, III章。および、Gastone Manacorda, *Il movimento operaio italiano attraverso i suoi congressi 1853-1892*, Riuniti, Roma, 1971, pp.93-145. また、渡辺孝次『時計職人とマルクス——第一インターナショナルにおける連合主義と集権主義』同文館、平成6年、参照。

- 3) Nicola Lisanti, *Il movimento operaio in Italia 1860-1980*, Riuniti, Roma, 1986. p.24.
- 4) Gino Cerrito, *Dall'insurrezionalismo alla settimana rossa - per una storia dell'anarchismo in Italia (1881/1914)*, Crescita Politica, Firenze, 1977, pp.161-164.
- 5) Carlo Cafiero. 1846年生～1892年没。バクーニンの熱烈的な思想的・財政的支持者。1879年にマルクス『資本論』第1部のイタリア語訳を刊行。
- 6) Errico Malatesta, 1853年12月4日カムパーニャ州Santa Maria Capua Vetereに生まれ、1932年7月22日ローマで死去。ナポリ大学で医学を修めたが医師にならず、革命家になった。たびたびの入獄、亡命にもかかわらず、アナキストとして一貫した。以下アナキストの生没年などの記事は、Enzo Santarelli, *Il socialismo anarchico in Italia*, Feltrinelli, Milano, 1977 (1959), pp.213-221.
- 7) コスタは、後にイタリア社会党の下院議員として活躍した。拙稿「イタリア社会党の結成1879年～1892年」『淑徳大学研究紀要』第15号, 1981年, 105～112頁。
- 8) Franco Bertolucci, *Anarchismo e lotte sociali a Pisa 1871-1901*, Franco Serantini, Pisa, 1988, pp.95-98. バタッキは後に1900年3月16日に釈放された。
- 9) Francesco Saverio Merlino, 1856年9月15日ナポリに生まれ、1930年6月30日ローマで死去。弁護士。理論家でマルクスの研究者でもある。マラテスタの友人であり、かつまた度々論争した。
- 10) Maurizio Antonioli, *Azione diretta e organizzazione operaia - Sindacalismo rivoluzionario e anarchismo tra la fine dell'Ottocento e il fascismo*, Lacaita, Manduria, 1990, pp.209-211. 大会決議文は、Cerrito, *Dall'insurrezionalismo* —, op. cit., pp.164-166.
- 11) マラテスタ, 木下茂訳「農民に伍して」小作人社, 昭和4年, 『農民の中へ』黒色戦線社, 1971年, 所収。

### Ⅲ. 1890年代前半の諸事件

1891年1月4～6日、スイスのルガノ湖畔のカポラーゴ (Capolago) で、アナキストの国際会議が80名余の代表によって開催された。イタリアの主な出席者は、マラテスタ、メルリーノ、アミルカーレ・チブリアーニ<sup>12)</sup>、ルイージ・ガッレアーニ<sup>13)</sup>、ピエトロ・ゴリー<sup>14)</sup>、ロメオ・ミンゴッツィ<sup>15)</sup>、エットーレ・モリナリ<sup>16)</sup>、パオロ・スキッキ (Paolo Schicchi)、チェーザレ・アゴスティネッリ (Cesare Agostinelli)、ジョヴァンニ・ベルガマスコ (Giovanni Bergamasco)、ガリレオ・パツラ (Galileo Palla) などであった。カポラーゴ会議の決議は、まずアナキズムの原則、1、個人財産の剝奪、2、国家および政府の廃止、3、自由協約によって結びあった労働者のアソシエーションによる共同の生産と消費の組織化、を確認した。次に方法として、あらゆる形態の宣伝、全ての労働運動と扇動への参加等を述べ、ことに失業者の組織化を強調した。そして革命的アナキスト社会党 (Partito Socialista Anarchico Rivoluzionario) イタリア連合を結成し、通信委員会を設置、ただし通信委員会は個々のグループに干渉しない、とした。<sup>17)</sup>

カポラーゴ会議において、チブリアーニは、メーデーに全力をあげて取り組むことを主張していた。メーデーは、1889年7月パリで開催された国際労働者大会（第二インターナショナル結成大会）の決議にもとづく国際的統一行動である。1891年5月1日、イタリアでは内務大臣命令による警備体制がしかれ、概して平穏であった。しかしローマのエルサレムの聖十字架（Santa Croce di Gerusalemme）広場では、官憲がアナーキストの反政府演説を制止し、デモ隊を解散させようとして実力行使に出た。デモ隊のなかに短剣をふるって闘う者がおり、混乱のなかでデモ参加者の一人（馬車の御者）が頭部打撲で死亡、また治安警察官一名が刺し傷で死亡、36名の負傷者（下院議員バルジライ Balzilai を含む）が双方に出た。チブリアーニも負傷し、逮捕された。<sup>18)</sup>

さきに1890年1月1日より、1859年のサルデーニャ王国刑法を1889年に改正した新刑法（しばしば「ザナルデッリ刑法」と呼ばれる）が施行されていた。新刑法の治安にかかわる条項には次のようなものがあった。第246条、犯罪を公然と扇動すること（3年以上5年以下の禁固および罰金）、第247条、犯罪を正当化すること、法律への不服従をあおること、公共の静穏にとって危険な方法で社会階級間の憎悪をあおること（3ヶ月以上1年以下の禁固および罰金）、第248条、犯罪のための結社、（すなわち）司法の支配、良俗や家族の秩序、あるいは個人や財産にたいする犯罪を行うために作られた5名以上の団体、第251条、（前記第247条の）犯罪を犯すことを目的とした結社、第252条、内乱罪および内乱使喚罪、等である。<sup>19)</sup>

ローマのメーデー事件によってアナーキストへの弾圧は一層厳しくなった。しかし1891年10月14日のアンコーナ控訴院判決では、アナーキスト団体であるからといって、それだけでは刑法248条の犯罪のための結社であるとみなすことはできないという司法判断が下された。その理由は、アナーキスト党の綱領は社会革命、国家と政府の廃止、個人と家族の財産の廃止等を示しているが、その方法を明確にしていない、すなわちアナーキスト党の綱領はユートピア的空想的であって、具体的手段に欠けるというものであった。これに対してまもなくローマ破棄院判決が、アナーキスト団体に刑法248条を適用できるという判断を下した。<sup>20)</sup>

翌1892年のメーデーにも政府は厳戒体制をとり、メーデー直前にアンコーナ、ラスペツィア（La Spezia）、トリーノなどで多数のアナーキストや社会主義者を検挙した。メーデー当日には、各地のアナーキズム系と社会主義系の新聞や出版物が発行停止命令・差し押えを受け、また検閲によって紙面の一部を空白にしなければならなくなった。この時期、マラテスタは大眾との結びつきの必要性を強調した。アナーキストは各地で労働者にかなりの直接的な影響力を持っていた。

1892年7月11日、フランスのアナーキストで、ダイナマイトを投げたり、他の殺人・傷害事件をおこしたラヴァショル（Ravacholは母方の姓、本名François Claudius Koenigstein、1859年生）のギョチン刑が執行された。これにかかわって1892年7～8月にマラテスタと、

フランスの過激なアナーキスト、アンリ（Emile Henry）とが論争した。マラテスタはラヴァショルの行為を批判して、「憎悪は愛をつくらず、憎悪をもってしては世界を革新できない。憎悪による革命は失敗し、また新しい抑圧となるであろう」と述べた。これに対してアンリは、「人間にたいする愛が憎悪——不正に対する憎悪——を生む。」「暴力的反乱の全ての行動は、新社会を準備し、社会的不正から人間を解放する行動である」と述べた。<sup>21)</sup>

もともとアナーキズムの思想は斉一的でなく、各人各様なのであるが、しいてこの頃のアナーキズムの潮流を分けると、マラテスタやメルリーノのように革命的社会主義という言葉を使う労働者組織を重視するものと、反対にはるかに個人主義的なものに分かれ、そして個人主義的潮流もクロボトキンのような平和主義的なものと、過激な行動主義的なもの、さらにはシュティルナーやニーチェの影響を受けたニヒリストで労働者組織と関らないものなどに分かれてきており、セクト化が目立ってきた。

1892年8月14～15日、ジェノヴァでイタリア社会党創立大会が開かれた。この大会において、かつてのインテルナツィオナリスタは、社会党系の社会民主主義者とアナーキストに決定的に分離し、別個の社会運動潮流となった。<sup>22)</sup>

1892年11月6・13日の下院選挙にあたって、アナーキストは反議会主義の立場で、棄権をアピールした。<sup>23)</sup>

1893年3月18日、ルッカ（Lucca、トスカナ州）の劇場で爆弾が破裂し、この件でアナーキスト達が逮捕された。同年のメーデーには、政府は又もアナーキストと社会主義者の新聞・出版物を差し押さえ、活動家を逮捕した。1893年8月17日、南フランスのエグモルト（Aigues-Mortes）では、フランス人労働者がイタリア人出稼ぎ労働者を襲撃し、死者負傷者多数を出す事件がおこった。この直後イタリアのいくつかの大都市で反仏暴動が自然発生したが、アナーキストの組織的関与は見られない。同年9月10日、マラテスタとメルリーノはフランスのアナーキスト紙に、ショービニズムに反対する見解を寄稿している。<sup>24)</sup>

1893年9月24日、スペインのバルセロナで軍隊のパレードに爆弾2発が投げられ、カンポス将軍（Martinez Campos）と警察官数名が死ぬ事件がおきた。スペインのアナーキスト、パラス（Paolino Pallas）の犯行であった。<sup>25)</sup>同年12月9日、パリでブルボン宮の国民議会議場に爆弾が投じられ、負傷者を出した。犯人はアナーキストのオーギュスト・ヴァイヤン（Auguste Vaillant, 1861年生）であった。ヴァイヤンは1894年2月5日にギョチン刑を執行されたが、この時「アナルシー万歳、我が死は復讐されるであろう」と叫んだ。<sup>26)</sup>ヨーロッパ諸国にアナーキズムへの恐怖がたかまった。

1894年1月3日、シチリアに戒厳令が布告され、ファッシ・シチリアーニへの弾圧が行われた。<sup>27)</sup>この弾圧に抗議するデモが1月6～7日に、アナーキストの勢力が比較的強かったトスカナ州ルニジャーナ地方のいくつかの町でおきた。さらに1月13日、この地方のカッラ

ーラ (Carrara) で大理石採掘労働者のストライキがおき、同日、マッサ (Massa) とカッラーラの間の街道にいくつかのバリケードが作られ、税務署が襲撃された。この地方のアヴァンツァ (Avanza) では、官憲と労働者の双方が発砲して、双方に死者1名ずつを出した。14日以降ルニジャーナ各地で小規模な反乱がおき、16日に戒厳令が布告され、17日には17名の死者を出して反乱が鎮圧された。アナーキストのルイーダ・モリナリ (Luigi Molinari) は、前年12月24～27日にカッラーラで講演したというだけで、反乱には実質的に関与していないにもかかわらず、1月16日に居住地のマントヴァ (Mantova, ロムバルディーア州) で逮捕され、軍事法廷で禁固23年を宣告された (上告審で禁固7年に減刑)。このルニジャーナ事件で逮捕された680名のうち、アナーキストと目されるものは約200名であったが、彼らには軍事法廷で苛酷な長期刑が宣告された。<sup>28)</sup>

1894年2月12日、フランスのアナーキスト、エミール・アンリが、パリのオテル・テルミヌ (Hotel Terminus) のカフェで死者1名を出す爆弾事件をおこして逮捕された。彼は他にも爆弾事件をおこしており、同年5月21日に死刑を執行された。イタリアでは、1894年3月8日にローマの王宮前で爆弾事件がおきて、負傷者8名を出し (内2名がその後死亡)、その後5月9日と5月21日にもローマの諸官庁で爆弾事件がおき、多数のアナーキストが逮捕された。1894年6月16日ローマで、アナーキストのパオロ・レーガ (Paolo Lega, エミリア・ロマーニャ州ルーゴLugo出身、職業は大工指物師) が、クリスピ首相 (Francesco Crispi) にむかってピストル2発を撃ったが、首相は難を逃れた。逮捕されたレーガは、7月に禁固20年17日を宣告され、1896年9月サルデーニャのサッサリ (Sassari) 刑務所で獄死した。<sup>29)</sup>

1894年6月24日、フランス共和国大統領カルノー (Sadi Carnot) がリヨンで、イタリア人アナーキスト、サンテ・カゼリオ (Sante Jeronimo Caserio) に短剣で刺されて死亡した。カゼリオは1873年12月8日ロムバルディーア州ミラノ県南部のモッタヴィスコンティ (Motta Visconti) に生まれた。彼の父は夏はティチノ川で船頭を、冬は木材伐採に従事する貧しい一家だった。カゼリオは10歳からミラノに出て、給仕をしていたが、そのうちにピエトロ・ゴーリのミラノのアナーキストグループと接触した。1892年4月26日、18歳のカゼリオは反軍国主義パンフレットを配って、初めて逮捕された。19歳で徴兵されたが、兵役を忌避して、1893年夏スイスへ亡命、その後南フランスの港町セート (Sete, Cette) に来た。犯行前日カゼリオは勤めていたパン屋を解雇され、その後カルノー大統領がリヨンに来ていることを知り、5フランの短剣を買い、セートから所持金で切符が買えるヴィエンヌまで汽車に乗り、24日雨の日曜日の午後、27km北のリヨンまで歩いた。その夜9時15分、劇場前で大統領の馬車に飛び乗って刺し、その場で逮捕された。襲撃直後カゼリオは「革命万歳、アナルキア万歳」と叫んだ。裁判は1894年8月3日に行われ、カゼリオは、自分の生活体験をもとにして、この社会には貧富が存在しており、悪しく組織されていると考えたと述べ、さら

に次のように陳述した。「私は神を信じていました。しかし人々の間のこうした不平等を見たとき、神が人間を創造したというのは真実ではなく、人間が神を作ったのであり、そして、個人財産を重んじさせようと望む者達が、人民を無知にとどめておくために、天国と地獄を信じさせて利益を得ていると知りました。」「我々貧しい労働者にとって祖国は存在しません。祖国とは、我々にとって全世界です。」即日死刑判決が下されたが、カゼリオは控訴を放棄し、また恩赦請願の署名を拒否した。カゼリオのギョチン刑は1894年8月16日払暁に執行された。<sup>30)</sup>

1894年7月1日、リヴォルノ (Livorno) の右翼系新聞社主バンディ (Giuseppe Bandi) が自宅前でオレステ・ルッケージ (Oreste Lucchesi) に刺殺された。ルッケージは逮捕され、尋問でリヴォルノのアナーキスト集会で扇動されたと自白した (現在では虚偽の自白と考えられている)。警察はもう一人の実行犯としてロゾリーノ・ロミーティ (Rosolino Romiti) を逮捕、さらに彼らを教唆扇動したとしてアメリゴ・フランキ (Amerigo Franchi) など5名のアナーキストを逮捕した。結局1895年5月22日フィレンツェ重罪裁判所判決で、ロミーティに終身刑、ルッケージとフランキに禁固30年の刑が宣告され (ルッケージはフランスへ逃亡)、他の者は証拠不十分で無罪となった。<sup>31)</sup>

## 註

- 12) Amilcare Cipriani, 1844年10月18日生～1918年5月2日パリで死去。ガリバルディ義勇軍、パリ・コミューンに参加した歴戦の民主共和主義者。カフィエーロと知りあって、インテルナツィオナリストとなる。幾度かの逮捕・入獄・亡命の後、1888年帰国。1891年のローマのメーデー事件後、亡命。1894年以降パリを本拠とする。1897年にはギリシャ側義勇軍に加わり、負傷。1914年下院選挙には、ミラノの選挙区で不在のまま抗議候補者となり、当選したが、国会で不承認。晩年はヨーロッパにおけるイタリア人の反体制活動家中の最有名人であった。思想的には、ガリバルディを尊敬し継承した人物で、マラテスタのような純粋なアナーキストとは少し異なる。
- 13) Luigi Galleani, 1861年8月12日Vercelliに生まれ、1931年11月4日Caprigliolaで死去。1880年代に北部イタリア各地で労働組合運動を行う。1890年代以降は、Max Stirnerの著作を紹介するなど、個人主義派のアナーキズムの著述家として知られる。
- 14) Pietro Gori, 1865年8月14日Messinaに生まれ、1911年1月8日Portoferraioで死去。Pisa大学卒業。アナーキスト、弁護士、大衆の人気をもつ詩人、著述家として活躍。何度かアメリカ合衆国 (パターソン) や南米 (ブエノスアイレス) に亡命。マルクス『共産党宣言』のイタリア語初訳を1888年に雑誌に発表、1890年に刊行したことで知られる。
- 15) Romeo Mingozzi, 1858年2月8日Ravennaに生まれ、1943年4月26日Bolognaで死去。1880年代からのインテルナツィオナリスト。主にForlìなどローマニャ地方において、農業労働者の労働組合運動で活動した。
- 16) Ettore Molinari, 1867年7月14日Cremonaに生まれ、1929年11月9日Milanoで死去。チューリッヒ大学で化学を学び、後ハイデルベルク、ロンドンでも化学を修めた科学者。ミラノ職業



専門学校、ボッコーニ大学、工科大学で教職を勤めた。青年時代からクロボトキンやマラテスタなどのアナーキストと交流があり、後に学術活動のかたわら、アナーキズム出版・啓蒙活動に参画した。

- 17) Carlo Cartiglia, *Il partito socialista italiano 1892-1962*, Loescher, Torino, 1978. pp.37-39.
- 18) Romano Canosa - Amedeo Santosuosso, *Magistrati, anarchici e socialisti - alla fine dell'ottocento in Italia*, Feltrinelli, Milano, 1981, p.40.
- 19) Ibidem, pp.11,53,55,122.
- 20) Ibidem, pp.38,45-48.
- 21) Cerrito, *Dall'insurrezionalismo* —, op. cit., pp.23-24.
- 22) 前掲, 拙稿「イタリア社会党の結成1879年～1892年」, 110～121頁。ただし社会党内は改良派と労働者主義派が対立し, 労働者主義派はアナーキストと連携することがあった。
- 23) Nunzio Dell'Erba, *Giornali e gruppi anarchici in Italia (1892-1900)*, Franco Angeli, Milano, 1983, pp.30-31. さらに当時ローマ教皇は, ローマをイタリア王国に奪われたという見地から, 1874年9月の回勅「ノン・エクスぺディット」によって, 信徒にイタリア王国議会選挙への参加・投票を禁じていた。これらの理由が合わさって, 投票率は極めて低かった。1900年の下院選挙でも, 有権者率が7パーセントに満たないのに, 投票率は全国平均で58.3パーセントであった。
- 24) この事件の死者数には諸説がある。一説に死者8名, Dell'Erba, ibidem, p.37, 一説に30名, Pier Carlo Masini, *Storia degli anarchici italiani nell'epoca degli attentati*, Rizzoli, Milano, 1981, p.16.
- 25) Dell'Erba, ibidem, p.38.
- 26) Masini, *Storia degli anarchici—attentati*, op. cit., p.39.
- 27) 拙稿「ファッシ・シチリアーニ再論」『淑徳大学研究紀要』第30号I, 1995年9月, 73～88頁。
- 28) Masini, *Storia degli anarchici—attentati*, op. cit., pp.25-31.
- 29) Dell'Erba, *Giornali—*, op. cit., p.49. Masini, ibidem, pp.35-36.
- 30) Masini, ibidem, pp.40-51.
- 31) Dell'Erba, *Giornali—*, op. cit., p.63. ただし Masini, ibidem, p.54ではRomitiの名前がRosalinoになっている。

#### IV. 1890年代後半の諸事件

クリスピ首相は1894年7月19日にアナーキストと社会主義者にたいする弾圧立法を成立させた。これは、1) 爆発物取締まりを強化する法律, 2) 出版物の取締まりを強化する法律, 3) 指定地居住強制 (domicilio coatto, 実質的には流刑) 改定法, および集会・結社の自由を制限する法律の3法 (法律314号, 315号, 316号) であった。2) の出版法は, 第一条に刑法246条・247条違反が出版物もしくは形象によってなされた場合には, 刑法の定める罰を1½倍加するとあった。3) の法律は1863年・1889年公安法の改定法で, 1895年12月31日までの時限立法であり, 以下のような点に特徴があった。第一条, 公の秩序・安全に対する侵犯や前記1) の爆発物取締法によって有罪となった者は, 指定地居住強制に処せされるこ

とがある。第二条、指定地居住強制の指定は県委員会が行う。ただしこの県委員会は、県裁判所長官、国王の派遣官、政府が任命する県副知事の中の1名の3名によって構成される。第三条、指定居住強制の期間は3年以下とする。第四条、県委員会による指定地居住強制受刑者の予防拘禁。第五条、社会秩序を暴力によって（per vie di fatto, 行為により）転覆する目的を持った団体・集会の禁止。違反者は禁固6ヶ月以下の罰。<sup>32)</sup>

クリスピ首相は1894年秋から冬にかけて、アナーキストと社会主義者の団体（社会党を含む）および労働組合等348団体以上に解散を命令し、また活動家の名簿を治安警察に作成させ、数多くのアナーキスト・社会主義者を逮捕した。スイスやフランスに亡命した者にたいして、さらにスイスの当該州政府とフランス政府が国外退去させたため、彼らはロンドン、南北アメリカ大陸、カイロなどに亡命した。逮捕されたアナーキスト多数が、ラムペドゥーサ島（Lampedusa, シチリア南方の島）、ポルトエルコーレ（Port'Ercole）、リパリー（Lipari）などに流刑になった。1894年1年間に3,021名の指定地居住強制が行われ、その内644名が1894年7月19日法によるものであった。社会党下院議員デフェリーチェジュッフリーダ（Giuseppe De Felice Giuffrida）の議会演説（1898年7月10日）によれば、1894～95年の2年間に4,895名の指定地居住強制が行われた。<sup>33)</sup>

1896年2月初め、シチリア南方のファヴィニャーナ島（Favignana）の流刑地で、配給食料が極めて少なく、その配給方法に不正があるなどのことに抗議して、アナーキスト達が反乱をおこした。同様の反乱が同年2月16日、ラムペドゥーサ島の800名の流刑者によっておこされた。さらに3月1日、トレミティ島（Tremiiti, プーリア州フォッジャ県北方20kmの島）でも、アナーキストのアメデオ・ボスキ（Amedeo Boschi, 1871年生～1956年没）、パスクワレ・ピナッツィ（Pasquale Binazzi, 1873年生～1944年没）など、約50名の流刑者が反乱をおこし、若いアナーキスト、アルガンテ・サルッチ（Argante Salucci）が官憲に射殺された。臨終にサルッチは同志に「さよなら同志、ヴィヴァ、ラナルキア viva l'Anarchia」と言った。<sup>34)</sup> このトレミティ島では、1896年4月にフィレンツェ出身の個人主義派のアナーキスト、ジュゼッペ・ガヴィッリ（Giuseppe Gavilli, 1855年生～1918年没）が、島民の子供達約60名を集めた小学校を始めたが、この小学校は3ヵ月半後に総督によって閉鎖された。1896年5月28日ファヴィニャーナ島から脱走した流刑者の中に2名のアナーキスト、ペッツィ（Francesco Pezzi）とパッラ（Galileo Palla）がいた。彼らは北アフリカのチュニスに逃れたが、そこで逮捕された。<sup>35)</sup>

メルリーノは、シチリアとルニジャーナの戒厳令の後、1894年1月30日にナポリで逮捕されて入獄したが、1897年1月末に出獄して、ナポリにいた。彼は1897年3月21・28日の下院選挙に先だって『メッサッジャーロ Il Messaggero』紙に、アナーキズムの選挙棄権戦術について、1）民衆の活動的・戦闘的部分から離れてしまうこと、2）対政府戦線を弱体化す

ることの二つの理由をあげて、選挙において扇動し、投票すべきであり、流刑中のアナーキストを抗議候補者として立てることを主張した。これに対してマラテスタは、1896年12月に帰国し、アンコーナで1897年3月14日に週刊誌『アジタツィオーネ L'Agitazione』を創刊していたが、抗議候補戦術は妥協とどっちつかずへの入口であると反論した。また、ヴェントターネ島 (Ventotene, ナポリ西方の島) に流刑中のアナーキスト8名は、『アッヴェニレ・ソチアーレ L'Avvenire sociale』紙に、メルリーノは議会の幻影に惑わされていると投書した (掲載は1897年4月10日号)。1897年下院選挙においても、アナーキストは議会主義を断固拒否する姿勢をとった。<sup>36)</sup>

1897年4月22日、ピエトロ・アッチャリート (Pietro Acciarito, 1871年生～1943年没、鍛冶工) がローマで国王ウムベルト一世を刺殺しようとして、未遂におわった。アッチャリートは、「アナルキア万歳」と言うなど、アナーキズムの影響を受けていた。彼は1897年5月28・29日の裁判で終身刑となった。この事件はアッチャリエートの全くの単独犯行であったが、共犯容疑で4名のアナーキストが逮捕された。しかし彼らは1897年11月4日に証拠不十分で無罪になった。<sup>37)</sup>

1897年5月17日、オスマントルコ・ギリシャ紛争のなかで、リッチョッティ・ガリバルディ (Ricciotti Garibaldi) が指揮するイタリア人義勇軍800名がギリシャ側に参戦した。この中にはチブリアーニとアナーキストも含まれていた。しかしマラテスタは、インターナショナルイズム、反戦平和主義の立場から、この参戦に反対した。<sup>38)</sup>

1897年8月8日、スペインの首相カノヴァス (Canovas) がサンタグエーダ (Santa Agueda, Guipuzcoa地方) で、イタリア人アナーキスト、ミケーレ・アンジョリッロ (Michele Angiolillo) に射殺された。アンジョリッロは、1871年フォッジャ (Foggia) 生まれの印刷工で、共和主義からアナーキズムへ転じ、ナポリ地方で活動していたが、1895年に亡命し、ヨーロッパ各地を転々としていた。彼は1897年8月19日に絞首刑となったが、処刑当日は神父の助けを拒絶した。<sup>39)</sup>

1898年春、不況が続く、失業が増加するなかでパン価格が高騰し、イタリア各地で「パンと労働」と叫ぶ民衆の反乱・暴動が連続して発生した。1898年の全国120市町以上におよぶ反乱・騒乱・暴動について詳細に述べることはできないので、ここではアナーキストの関与ないし影響が考えられるいくつかの事件についてのみ記すことにする。<sup>40)</sup>

アンコーナでは、1898年1月15日にパン価格が1kg当り50チェンテージミに上り、1月17日には女性と若者を中心にした100名ほどのパン価格高騰抗議デモが官憲と衝突した。1月18日、アナーキストが影響力を持っていた港湾労働者を先頭に民衆が、「アナルキア万歳、社会革命万歳」と叫びながら街頭デモに出て、官憲と衝突した。歩兵5個中隊と騎兵2個大隊が鎮圧に出動し、カプール広場で集会を開いていたマラテスタと社会党のボッコーニ

(Alessandro Bocconi) を逮捕した。しかし民衆は抵抗を続け、翌1月19日には穀物商の邸宅が略奪・放火され、1月20日に戒厳令が布告されて、暴動は鎮圧された。同じマルケ州アンコーナ県のセニガッリア (Senigallia) では1月18・19日に、アナーキストを先頭とする民衆が穀物倉庫と穀物輸送列車を襲撃・略奪し、市長がパン価格を30チェンテージミへ引き下げる命令を出した。アンコーナ県キアラヴァッレ (Chiaravalle) では1月20日、1,000名の民衆が女性を先頭に「社会革命万歳、国王万歳」と叫びながらデモを行って、官憲と衝突した。マルケ州ではこのほかにもいくつかの騒乱が発生し、後に合計240名以上の民衆が起訴された。

1898年4月21日から5月2日まで、アンコーナでマラテスタを筆頭とするアナーキスト達の裁判があり、メルリーノとゴーリが弁護にあたった。弁護側は、被告のうちの数名にアリバイが成立することなどをつき、結局、マラテスタに禁固7ヶ月罰金150リラの比較的軽い判決が下り、また数名が証拠不十分で無罪になった。<sup>41)</sup>

4月27日、プーリア州バーリ (Bari) では、民衆が警察、税務署、関税事務所を襲って破壊し、貿易倉庫を略奪し、ゼネストを宣言した。市長はパンにかかわる地方税を全廃した。同日バーリ県各地で民衆の反乱がおこり、ミネルヴィーノムルジェ (Minervino Murge) では、民衆が刑務所から囚人を解放し、電報局を占拠し、穀物商邸などを襲撃したが、軍隊によって民衆4名が射殺された。4月28日バーリ県に戒厳令が布告され、1,500名が逮捕された。

4月30日、カムパーニャ州ナポリでは、パン価格が1kg当り55チェンテージミに上がり、二人のアナーキスト、デルジューディチェ (Francesco Del Giudice) とカコッツァ (Francesco Cacozza) が先頭に立って民衆を率い、県知事と交渉して、パン価格引き下げ命令を出すことを約束させた。

5月2日エミリア・ロマーニャ州パルマ (Parma) では、200名のコルセット女工を先頭にする民衆が、製粉所を略奪し、市内にバリケードを作ったが、5月3日に戒厳令が布告されて、反乱は鎮圧された。

5月2日、トスカーナ州フィレンツェ県フィリーネヴァルダルノ (Figline Valdarno) では、鉄道建設労働者200名を先頭とする民衆が穀物倉庫を襲い、また一団の青年が標的射撃場に侵入して、銃12丁と弾丸200発を奪い、官憲と撃ちあって、死者1名が出た。5月6日、フィレンツェでは、煉瓦積み工のデモを発端にして、民衆と軍隊が衝突し、死者2名を出した。同じく5月6日トスカーナ州リヴォルノでは、市内各地にバリケードが作られ、赤旗が立てられた。同日戒厳令が布告されたが民衆の抵抗は7・8日も続き、労働者3名が死亡した。トスカーナ州プラートでは、5月6日から9日にかけて、毛織物工場の労働者を中心にした民衆が穀物倉庫を襲い、さらにバリケードを作って軍隊と衝突し、負傷者多数を出した。5月8日、トスカーナ州ピーザ県ポンテデーラ (Pontedera) では、失業者のデモから軍隊との

衝突が生じ、死者5名をだし、同日、同州グロッセート県ロッカストラダ（Roccastrada）では、アナーキストに率いられた民衆が「社会主義万歳、革命万歳、政府打倒」と叫びながらデモを行い、さらに富豪の邸宅などを破壊した。

5月6日、ミラノで労働者が街頭に出て軍隊・官憲と衝突し、この夜戒厳令が発令された。7日・8日、ミラノ市内十数ヵ所にバリケードが作られ、ゼネスト状態になった。軍隊はバリケードを砲撃し、抵抗する民衆を射撃しつつ鎮圧し、125名以上の死者をだし、9日には反体制派の指導者多数を逮捕した。

ナポリでは、5月9日の昼、ナポリ大学の学生と労働者達が「ミラノの兄弟万歳、社会革命万歳、共和国万歳」と叫びながら赤旗を持ってデモを始め、市内4ヵ所にバリケードを作り、10日に戒厳令が布告され、軍隊との衝突で死者2名を出し、1,000名以上が逮捕された。

ミラノの事件後もさらにイタリア各地に民衆反乱が起きたが、新聞多数が発行停止となり、あるいは検閲によって報道されなくなり、記録に乏しい。5月14日、ピエモンテ州クネオ県アルバ（Alba）では税務署が襲撃され、アナーキストが逮捕された。後の計算によると、1898年の諸事件の裁判では、ミラノ軍事法廷で計1,435年8ヵ月の禁固刑、フィレンツェ軍事法廷で1,156年6ヶ月の禁固刑、ナポリ軍事法廷で450年の禁固刑、その他の裁判を合計すると、4,992年の禁固刑が宣告されたという。また逮捕を逃れたアナーキストや社会主義者3,000人がスイスなどへ亡命したといわれる。

1898年9月10日、スイスのジュネーヴのホテル前で、オーストリアのフランツ・ヨーゼフ一世妃エリザベート（1837年生）が、ルイーギ・ルッケーニ（Luigi Luccheni, フランス名 Louis Lucheni, 当時25歳と自称）に刺殺された。ルッケーニは、パリに移ってきたイタリア人労働者の子供で、幼時は孤児院で養育され、その後イタリアのパルマの農家で育てられ、高等小学校にもゆき、成人した。兵役の後パルマで働き、さらにハンガリー、オーストリアを放浪し、スイスでは石切り工をして生活していた。彼は放浪生活中にアナーキズムに接近し、コミュニストと自称した。裁判でルッケーニは死刑を望んだが、1898年11月11日終身刑を宣告され、1910年10月19日ジュネーヴの獄中で首吊り自殺を遂げた。<sup>42)</sup>

1898年11月24日から12月21日までローマで、イタリア政府主催の国際反アナーキスト会議が22カ国代表によって開催された。イタリア政府は、アナーキズムはいかなる意味でも政治理論ではなく、その行動はすべて破壊を目的としているという定義を採択しようとしたが、イギリスなどが同調せず、これは採択されなかった。<sup>43)</sup>

マラテスタは、1898年1月に逮捕され、禁固刑の後、さらにラムペドゥーサ島へ指定地居住強制になっていたが、1899年4月22日、同志2名とともにボートで島を脱出し、チュニス、マルタ島を経て、5月ロンドン着、さらに1899年8月12日ニューヨークへ着き、ニュージャージー州にしばらく滞在した後キューバへ渡った。ニュージャージー州パターソン

(Paterson) は、当時繊維産業が盛んで、多数のイタリア移民が働いており、アナーキストも多く、その頃ジュゼッペ・チャンカビツラ<sup>44)</sup>も来ていた。チャンカビツラは個人主義的過激派であり、組織重視のマラテスタとは意見を異にしていた。マラテスタは1899年9月3日、ウェストホボケン (West Hoboken) でのアナーキスト集会に出席したとき、ファナティックなアナーキスト、パッサリア (Domenico Passaglia) に銃で脚を撃たれた。<sup>45)</sup>

1899年6月に恩赦が、1899年12月31日に大赦が行われ、アナーキストや社会主義者が多数釈放された。1900年6月3・10日に下院選挙が行われ、議会極左派三党が躍進した。

1900年7月29日の夜、国王ウムベルト一世がアナーキスト、ガエターノ・ブレッシ (Gaetano Bresci, 当時30歳) に狙撃され、死亡した。ウムベルト一世は、1896年3月の「アドゥアの敗北」事件の後はことに人気が無く、1898年の大弾圧後は「機銃王」とか「ウムベルト一代限り」などと陰で呼ばれていた。国王は7月19日にナポリで義和団事件で出兵する軍隊を閲兵した後、21日モンツァ (Monza, ミラノ県) の離宮に帰り、29日 (日曜日) に体育競技会の表彰式に出席し、帰る時ボルバーで3発撃たれて、同日深夜死亡した。ブレッシはその場で逮捕された。

ブレッシは1869年11月10日にトスカーナ州プラート県コイアーノ (Coiano) の貧家に生まれ、11歳でプラートの絹工場の見習工となり、努力して日曜日の技術学校で学び、熟練工となった。彼は15歳でアナーキストと接触し、1892年にストライキに関与して有罪判決を受け、1895年に指定地居住強制になり、1895年にプラートにもどったが職が無く、1898年1月、親戚とともにアメリカ合衆国へ渡った。彼はパターソンの繊維工場でまじめに働き、アイルランド女性と結婚して一女をもうけた (1901年1月に次女出生)。ブレッシは1900年5月17日、突然ニューヨークから船出し、パリ万国博に行った後、故郷で兄弟に会い、その後イタリア北部を旅行して1900年7月27日モンツァに着き、犯行におよんだ。

ブレッシの裁判の実質的な審理は、ミラノ重罪裁判所で1900年8月29日の一日だけ行われた。弁護士にはミラノ弁護士会長マルテッリ (Luigi Martelli) と、二日前に指名されて駆けつけたメルリーノが付いた。ブレッシは国王殺害の事実を認め、その動機について、国王は1893年のシチリアの戒厳令・弾圧と1898年のミラノ等の戒厳令・弾圧に責任があると考えたからだと述べた。そして裁判長の、国王は内閣の要請に従い、法律に従っただけで、責任は無いではないかという意味の質問にたいして、「いや、彼はそれに署名した」と答えた。またブレッシは、マルテッリの弁論に口をはさんで、「私は狂人ではない。私は狂気の行為として裁かれることを望まず、革命的行動として (裁判されたい)」と述べた。その日の6時過ぎ判決が下され (判決文は裁判長の勘違いでウムベルト一世の名で読まれた)、終身刑、そのうち7年の独房拘禁、公民権停止となった。ブレッシはその後、1901年5月22日にサントステファアーノ (Santo Stefano) 刑務所で首吊り自殺を遂げた。<sup>46)</sup>

国王殺害事件直後、ローマのアナーキストグループは、人間の生命の不可侵性を強調する回状を出して、暗殺行為を否定した。マラテスタは前からテロリズムを明確に否定していたが、この事件について、ブレッシを弁護して次のように論じた。「環境や教育やうけついだものを考慮して、権能を持つ者の個人的責任について大幅に軽減したり、全く免じたりすることは正しい。だがそれならば、もしも国王がその行ったことと放棄したことに責任が無いのならば、もしも彼の名において行われた民衆の虐殺、剝奪、弾圧にもかかわらず、彼が国王の席に着いていなければならなかったとしたならば、どうしてブレッシに責任があるのだろうか。」<sup>47)</sup>

ブレッシの事件後、数百人のアナーキストが逮捕されたが、大部分がまもなく釈放された。反動と大弾圧はおこらなかった。20世紀に入ってイタリアの政治情勢はジョリッティ内閣時代に変化し、アナーキストや社会主義者の合法活動は、表面上直接の弾圧を受けることは少なくなった。

1901年9月5日、アメリカ合衆国大統領マッキンリー (William McKinley) がバッファロー (Buffalo) で、ポーランド出身のアナーキスト、レオン・チョルゴズ (Leon Czolgoz) に射殺された。チョルゴズは1901年10月29日に電気椅子刑に処された。1902年11月15日ブリュッセルで、ベルギー国王レオポルド一世 (Leopold I) が、銃撃され、死亡した。犯人のジェンナーロ・ルビーノ (Gennaro Rubino, 当時43歳) は、イタリアのプーリア州バーリ県ビトント (Bitonto) の出身で、ロンドンに移住していた。ルビーノは、自分は孤立したアナーキストであり、単独犯行であると供述したが、しかし、ルビーノは警察の密告者であり、背後に陰謀があるとみるチャンカピッラのような意見もあり、この事件には不明なところがある。そしてこの事件を最後に、アナーキストによる「暗殺時代」は終わった。かわってゼネラルストライキが大きな問題となるのである。<sup>48)</sup>

## 註

- 32) Vera Modigliani/AA. VV., *Attività parlamentare dei socialisti italiani*, vol. I, ESMOI, Roma, 1967, pp. 238-243. および拙稿「イタリア社会党と議会 (1892年～1900年)」『淑徳大学研究紀要』第19号, 1985年3月, 103～104頁。
- 33) Dell'Erba, *Giornali*——, op. cit., p. 85.
- 34) Ibidem, pp. 86-87.
- 35) Masini, *Storia degli anarchici——attentati*, op. cit., pp. 67-68.
- 36) Dell'Erba, *Giornali*——, op. cit., pp. 95-98.
- 37) Ibidem, pp. 101-104.
- 38) Masini, *Storia degli anarchici——attentati*, op. cit., pp. 94-95.
- 39) Ibidem, pp. 115-116.
- 40) 1898年全国暴動については、拙稿「イタリア資本主義の発達と大衆運動」慶応義塾経済学会

編『三田学会雑誌』第66巻第1号, 1973年1月, 72~74頁。および, Renzo Del Carria, *Proletari senza rivoluzione, Oriente*, Milano, 1966, vol. I, pp. 301-324. および, Giuseppe Galzerano, Gaetano Bresci - La vita, l'attento, il processo e la morte del regicida anarchico, Galzerano, Salerno, 1988, pp. 28-31.

- 41) Dell'Erba, Giornali——, op. cit., p. 125.
- 42) Masini, *Storia degli anarchici——attentati*, op. cit., pp. 117-118, 246-247.
- 43) Ibidem, pp. 122-123.
- 44) Giuseppe Ciancabilla, 1872年ローマに生まれ, 1904年アメリカ合衆国サンフランシスコで死去。イタリアではマラテスタとも協力していたが, 1898年事件後の弾圧を逃れてアメリカに渡り, この頃から個人主義と非合法闘争を強調するようになる。アメリカでアナーキズム誌を発行し, またクロボトキン『麵麩の略取』をイタリア語訳した(1903年にマントヴァで刊行)。
- 45) Galzerano, Gaetano Bresci, op. cit., p. 11.
- 46) Ibidem, pp. 35-85.
- 47) Ibidem, p. 171. なお, イタリアの犯罪人類学者チェーザレ・ロムブローゾ(Cesare Lombroso)は, アナーキストの暗殺者達を3種類に分類して, 狂人(パッサナンテ, アッチャリート), 犯罪者(ラヴァショル), 熱情家(カゼリオ, ヴァイヤン, アンリ)としたが, プレッシはこれらとは異なる政治的理由による犯行と述べた。Masini, *Storia degli anarchici——attentati*, op. cit., p. 157.
- 48) Masini, *Storia degli anarchici——attentati*, op. cit., p. 182-183.

## V. メルリーノの「アナーキズムの終焉」

1907年6月16~20日にローマで, イタリア・アナーキスト大会が開催され, イタリア各地から37団体の代表が出席した。1908年後半にイタリアに存在したアナーキスト団体は242団体で, 組織派のアナーキストは, アンコーナ, トスカナ州のカッラーラ, ピーザ, リヴォルノ, そしてローマにおいて比較的大きな力を持っており, 個人主義派はナポリなどイタリア南部に多かった。このローマ大会は, 議会主義を否定し, 合法主義への転落を警戒したが, また, 孤立からの脱却をはかり, 労働者の経済組織=労働組合への参加を強調した。

この会議開催中の6月18日, 『スタムパLa Stampa』紙に, メルリーノ——彼は1899年にイタリア社会党に加入していた——に新聞記者ソブレーロ(Cesare Sobrero)がインタビューした記事が「アナーキズムの終焉」というタイトルで掲載された。以下にこのメルリーノの論点を要約紹介する。<sup>49)</sup>

今日アナーキズム運動は重要性をもたない。なぜならば, 残されるように定められたアナーキストの諸原理のいくつかの部分は, 社会主義の中へ浸透し拡散し, 一方ユートピアを構成する部分は, もはや価値をもたないものとして, ユートピアであると認識された。(ここでメルリーノが言っている社会主義とは, ドイツ社会民主党的な「国家の社会主義」と対立するものである。) 社会主義の前進によって, アナーキズムの綱領の本質的部分の社会主義による吸収現象がおこったのである。今度のローマ会議やアムステルダム国際アナーキスト大会



(1907年8月)などは、死骸に生命を与える試み以外の何物でもない。

イタリアでは現在でもアナーキストのグループ、連合、機関紙が存在している。しかし現在、アナーキスト党は、個人主義者達と組織主義派の二つの異なる傾向によってばらばらにされている。イタリアには、旧インテルナツィオナリスタの党の老人達がいる。この生き残りの人々に、イタリアのアナーキズムは縮小している。思うに、アナーキスト党は終焉すると定められている。クロポトキンとルクリュ (Elisée Reclus) はアナーキスト党の最後の人物である。もはや目立った政治的・科学的作品は、アナーキスト党の人々からは産まれていない。

インタビュアーのまとめでは、メルリーノによると、理論と運動としてのアナーキズムは、もはや今日存在する必然的理由を持たないことになる。

この記事についてメルリーノ自身が、『思想Il Pensiero』1907年7月16日掲載のルイージ・ファブブリ (Luigi Fabbri) 宛公開書簡において、自分はアナーキスト党の停滞した現状を憂い、革新を求めているのであると弁明した。

メルリーノのセンセーショナルな発言に対して、メルリーノやマラテスタのような組織派ではないが、労働組合とのかかわりも深く、またテロリズムに反対するガッレアーニが行った反論を要約紹介する。

ガッレアーニによるアナーキズムの原理の説明は次のようなものである。

アナーキズムとは、「アナルキア」と呼ぶ社会状態を称賛し、そのような理想を目指す政治理論である。すなわち、生産・交換手段の共有 (私有財産制度の廃止)。各人は自己の力と性向にしたがって、自発的に生産への貢献をなす。人々の関心の全般的結合と、個人またはアソシエーションとして関与する人々の自由な協約においては、解放された社会における個人の自治が保証される。そこでは搾取、権威、強制のすべての形態が否定される。このような社会を「アナルキア」と呼ぶ。

一方、イタリア社会党のような社会主義的集産主義は自由と平等の問題を解決していない。彼らは社会を、敏捷な、幸運な等々の強い階級と、遅い、無能な、侮辱を受ける、悲惨な弱い階級に、再び分けるという不平等をもたらす。また社会主義的集産主義は、少数に対する多数の支配によって、自由の否定である独裁をもたらす。

アナルキアの社会では、政府、議会、内閣、警察、司法・行政官などは全く存在しない。管理の問題については、自由なアソシエーションにおける自由な個人は、自ら自己の利害の管理に直接当たる。

アナーキズムの死の宣告に対して、アナーキズムの幹は生きている。アナルキアは未来である。

## 註

- 49) この章の記述は全て下記による。Luigi Galleani, *La fine dell'Anarchismo?*, Antistato, Cesena, 1966(Ristampato;a cura di G.Rose, Ed. della rivista "Anarchismo", Catania, 1978.)

## VI. 総括

19世紀末は、アナーキスト、アナーキズムという言葉が世の中を震撼させた時期であったが、同時にアナーキズム運動の実質的衰退期でもあった。アナーキストによる対個人テロルは、労働者大衆の心理に内在する復讐心を行動にあらわしたものであるが、社会問題の解決策にはならなかった。マラテスタのような労働者の大衆的・組織的運動を重視するアナーキスト達は、くりかえし労働組合へのアナーキストの参加を強調したが、労働組合や協同組合での活動に日常かかわった人々は、さらに選挙・議会・自治体行政への参加の方向に進み、結果的に反議会・無政府のアナーキズムとは距離をおくようになっていった。このような意味で、アナーキズムは、勤労大衆と支配階級が隔絶している前近代社会における、直接民主主義を要求する観念に基礎をおいており、経済社会における個人的・直接的な利害の追求の問題が目の前に現れる近代資本主義社会における勤労者の組織的利害追求活動とは、「労働者の解放、搾取の廃絶」などの言葉の上では類似していても、本質的に異なるものであると考えられる。そのためかえって、近代社会組織としての行政や政党や労働組合に対するアナーキストの批判には鋭いものがあるのだが、同時に社会的生産力の発展、すなわち豊かさの追求という社会の大きな動向に対しては無力を示したと考えられる。

## Anarchismo in Italia alla fine dell'Ottocento

Ryusaku YOKOYAMA

I . Questo saggio è la storia del "l'epoca degli attentati" degli anarchici italiani alla fine dell'Ottocento.

II . Bakunin ottiene dei fautori in Italia dal 1864 al 1867. I internazionalisti italiani sostennero il Internazionale Bakunista negli anni 1870.

III . I internazionalisti italiani si scisero in due correnti socialisti ed anarchici al Congresso di Genova del Partito dei Lavoratori Italiani il 15 agosto 1892.

13 - 17 gennaio 1894, moto insurrezionale e stato d'assedio in Lunigiana.

24 maggio 1894 a Lione, Sante Caserio uccide Sadi Carnot, il Presidente francese.

16 giugno 1894, tentato di Paolo Lega contro Francesco Crispi.

IV . Il 8 agosto 1897, Michele Angiolillo uccide Canovas, il presidente del consiglio spagnolo.

Gennaio - maggio 1898, moti del "Pane e Lavoro". 17 - 18 gennaio 1898, moti di Ancona ed arresto di Errico Malatesta.

10 settembre 1898 a Ginevra, Luigi Luccheni uccide Elisabetta, l'imperatrice d'Austria.

29 luglio 1900 a Monza, Gaetano Bresci uccide Umberto I.

V . L'intervista di Francesco Saverio Merlino, "La fine del Anarchismo", e la confutazione dell'anarchico Luigi Galleani. Da Galleani, il anarchismo è il movimento dei lavoratori per conseguire "l'anarchia".

VI . Conclusione. L'azioni degli anarchici stupefecero gli europei ed italiani alla fine del XIX secolo. Ma il movimento anarchico declinamo nell'epoca. I attentati anarchici è le manifestazioni del spirito di vendetta della massa lavoratore. L'idea anarchico è premodernistico ed è stato inadattabile allo sviluppo economico italiano.